

***Nayatrāyapradīpa* of Trivikrama:**

A Preliminary Report on the Newly Surfaced Sanskrit Manuscript

⟨in Japanese⟩

Kazuo Kano

Lecturer, Komazawa University

Xuezhu Li

Researcher, China Tibetology Research Center

Abstract

The present paper is a preliminary report on the newly surfaced Sanskrit manuscript of the *Nayatrayapradīpa* (the Lamp of the Three Methods). This work discusses the relationship between the three methods, i.e., *śrāvakanaya*, *pāramitānaya*, *mantranaya*, in about 19 verses and prose, and is a very early work in this genre of literature. Despite of its importance, this work has not been sufficiently studied, for it has been known only in the form of a Tibetan translation (Derge Tohoku no. 3707, Peking Otani no. 4530) and from several quotations cited in other works. The Sanskrit manuscript was found from a palm-leaf set of minor works preserved in the collection of Potala Palace (Luo Zhao, Potala, śāstra, box no. 53), but the title of the present work was not mentioned in Luo Zhao's catalogue. The length of this work is 23 folios. The name of the author of this work had been known only from the colophon of the Tibetan translation and Tanjur catalogues in puzzling forms, which describes the name as *tri pi ṭa ka ma la* (in the colophon) or *tri bi ka ma la* (in Tshal pa Tanjur catalogue), but now is known from the colophon of the Sanskrit manuscript as *trivikrama*. Judging from its contents, the work was probably composed about 9th or 10th century. We are currently preparing a critical edition and annotated translation of the work.

要 旨

本稿は *Nayatrayapradīpa* の新出梵本およびその周辺について予備的な報告を行うものである。*Nayatrayapradīpa* は、三種の理趣 (*nayatraya*)、つまり声聞理趣、大乘の波羅蜜理趣、大乘の真言理趣の優劣について 19 偈ほどの韻文および散文によって論じる作品である。三つの教えの優劣を体系的に論じるテキストとしては、かなり早期の作品であり、内容的にも貴重なものであるが、これまではチベット訳（デルゲ版 3707 番、北京版 4530 番）、および他書におけるわずかな引用という形で、いわば不完全な形でのみその存在が確認されており、サンスクリット原典は失われたものと考えられていた。ところが近年、ポタラ宮の所蔵される梵文写本のコレクションのなかから、その原典を確認することができた。梵文写本は 23 葉からなる完本である。著者名について従来チベット訳で知られていた *tri pi ṭa ka ma la*（本来はツェルパ目録所掲の *tri bi ka ma la* か）は、梵本では *Trivikrama* と記されることが知られた。内容から判断するにその成立はおおよそ 9-10 世紀ころと推定される。本書の梵文校訂本と訳注については、順次発表してゆく予定である。

Nayatrāyapradīpa

—新出梵本の予備的報告—

加納 和雄・李 学竹

キーワード：Nayatrāyapradīpa、Trivikrama、梵文写本、概観

1 はじめに

インドにおいて仏教は、釈尊の教えに端を発し、そして大乘仏教の登場によってひとつの転機を迎え、さらに密教の登場によってもうひとつの転機を迎えた。もちろん歴史的には、仏教教団をとりまく経済・社会・政治状況や支援者の変遷など様々な変化があったのだが、さしあたって、およそ八世紀以降のインドの仏教者たちにとっての関心は、その三つの段階の異なる教え、つまり声聞乗、大乘、密教のあいだの関係性を明かすことにあり、それは喫緊の課題であったと考えられる。

インドのみならず、中国、日本、チベットにおいても、多様な教えを、ひとつの完成したヒエラルキーの中に落とし込んで体系化しようとする営みが盛んに行われたことは周知の通りである。中でもとくに、密教までをも含むものとしては、空海による顕密の教相判釈や十住心の体系、そしてチベットの宗義書文献群、道次第文献群などが挙げられる。

インド外部で生まれたそれらの文献類の記述内容と、本稿で扱うインド撰述のそれとのあいだには、確かに多くの共通点も看取されるのだが、同時に核心的な違いもある。とくに、インド外部において声聞乗がほぼ架空の存在として語られるのに対して、インド撰述の文献の中において声聞乗は実在する人たちを相手にして議論がなされている。それゆえ、声聞乗からの声が圧倒的なリアリティをもっている。

当時のインドにおいては、声聞乗、大乘（波羅蜜理趣）、密教の三者の教えが同時に併存し、各々を担う人々が活躍する現実があり、多くの仏教者たちはその中から択一的にひとつの教えを選択し、信仰、実践していた可能性が高い（ただし中には兼修というありかたも存在したであろう）。

これら三者を扱うインド撰述の同系統の文献としては、アドヴァヤヴァジュラの *Tattvaratnāvalī* や、その弟子サハジャヴァジュラの著 *Sthitisamāsa* あるいはラトナーカラシャーナンティに帰される *Triyānavyavasthāna* など、数点が知られている⁽¹⁾。このような

⁽¹⁾ 磯田 1978、Szántó 2015 ほか参照。インド、チベットにおける宗義文献（密教を除く場合

ジャンルに属するテキストがいつ頃からつくられ始めたのかは定かではないが、本稿で扱う、*Nayatrayapradīpa*（三理趣灯火）は、その中でも早期に位置する可能性がある。本書はチベット訳の大蔵経目録類では「道次第」（lam gyi rim pa）の項目下に分類されることもある（後述第3節参照）。

同書は、声聞乗、大乘、密教を、三つの「理趣」（naya）として語り、その優劣を論じる作品である。これまで同書は、チベット訳および他書における僅かな引用によって、いわば不完全な形でのみ知られていたが、最近、その梵文写本の存在を確認することができ、その内容が鮮明になりつつある。本稿筆者は、目下、その解説を進め、梵文校訂本の制定作業を行っている。以下、本稿においては同書の新出梵文写本について予備的な報告を行いたい。

2 先行研究

Nayatrayapradīpa の存在をとりわけ著名にしてきたのは、広く人口に膾炙し、多くのインド撰述作品に引用されてきた、次の偈頌である。

到達点は同一だけれど、愚鈍（のろま）でない点で、多くの方便を持つ点で、難行ならざる点で、機根鋭き者を専らとする点で、真言の論典は勝れている。

ekārthatve 'py asaṃmohād bahūpāyād aduṣkarāt |
tīkṣṇendriyādhikārāc ca mantraśāstraṃ viśiṣyate ||

この偈頌は、同じ大乘の中で、顕教（波羅蜜理趣）と密教（真言理趣）とでは、さとりというゴールに違いはないのだけれども、そこに至る手立てが異なっており、両者を比較すると、密教のほうの方が勝れていことを謳っている。アイザクソン氏の報告によると、18 点にのぼるインド撰述文献の中に同偈がみつかるという⁽²⁾。

その知名度にも関わらず、本書の内容はこれまで十分に解明されてきたとはいえない。本書の内容の大筋は、プトゥンの記述に沿ってそれを要約紹介した磯田 1979 から窺い知ることができる⁽³⁾。また、磯田の指摘の中で特筆すべき点は、カマラシーラの手になる『一切法無自性論証』（D 3889）に援用される一連の經典の引用文が、ほぼまるごと

が多い）を網羅したものについては、御牧克己氏による一連の御研究を参照されたい。

⁽²⁾ 2015 年 9 月 20 日に高野山大学において開催された日本印度学仏教学会において Harunaga Isaacson 氏は、Strategies of Supremacy: Claims for the superiority of the Mantranaya over the Pāramitānaya in late Indian tantric Buddhist texts と題して、口頭発表され、その際のハンドアウトを参照した。Isaacson & Sferra 2014: 393 も参照。同偈については磯田氏が早くから注目しており、引用文献についてもまとめている（磯田 1978: 114 n. 8）。mantranaya と mantrayāna という語句については松長 1973 参照。

⁽³⁾ *rGyud sde spyi'i rnam par gzhag pa rgyud sde rin po che'i mdzes rgyan*, In: *Collected Works of Bu ston rin chen grub*, New Delhi: International Academy of Indian Culture 1969, vol. 15. fols. 6–11. 磯田 1979: 101 n. 2.

本書の中に見つかることである⁽⁴⁾。もし本書がこれらをカマラシーラの同著から借用したとするならば、その成立はカマラシーラよりも後のこととなる。

またオニアンズ氏は、本書のチベット訳にもとづいて、第 10 偈以下、波羅蜜理趣の卓越性および真言理趣の卓越性の箇所を抜粋しながら英訳を付して紹介している⁽⁵⁾。

サント氏は、事典の項目 (Tantric Prakaraṇas) の中で本書の概要を提示し、九世紀よりも後の文献を引用していない点を指摘する⁽⁶⁾。

3 チベット訳本

本書のチベット訳は、チベット大蔵経論疏部 (デルゲ版 3707 番、北京版 4530 番など) に収録され、デルゲ版にして 20 葉ほどの小作品である。チベット語への訳出作業に携わったのは、その奥書によると、パドマーカラヴァルマンとリンチェンサンポ (954–1055) である。このことから、本書は少なくとも 10 世紀ころのカシュミールには流布していたことが知られる。

チベットにおける大蔵経の目録類の記述をみると、1260 年代末から 1270 年代初頭にかけて完成した⁽⁷⁾のチョムデンレルティの目録 (*bsTan pa rgyas pa rgyan gyi nyi 'od*) において、「リンチェンサンポの訳書」の中の「一般的な論書」(*Phyi'i bstan bcos*) の項目化に "*tshul gsum gyi sgron ma **ṭi pi tra ka ma las mdzad pa***" とある⁽⁸⁾。

ウーパロサルの論疏部目録 (1305 年頃成書か) では、第 10 章「各規範師が著作なさった真言の灌頂および道次第」(*slob dpon so sos mdzad pa'i gsang sngags kyi dbang dang lam gyi rim pa*) の 11 番目のテキストとして "*slob dpon **tri pi ṭa ka ma la mdzad pa'i tshul gsum gyi sgron ma rin chen bzañ po'i 'gyur***" とある。同目録には二種の写本があるのだが、双方の写本において著者名がチベット語に訳されて行間に注記されている。ひとつには *Pad ma sde snod gsum* とあり、もうひとつには *sDe snod gsum gyi pad ma* とある⁽⁹⁾。

ツェルパ・ムンラムドルジェの論疏部目録 (1312–1323 頃成書) では、「真言全般の道次第と宗義論書」(*sngags spyi'i lam rim dang grub mtha'i bstan bcos*) の項目下で "*tshul gsum gyi sgron ma mtho btsun **tri bi ka ma las mdzad pa rin chen bzang po'i 'gyur***" とある⁽¹⁰⁾。

⁽⁴⁾ 当該箇所については Moriyama 1984 がチベット語校訂テキストと英訳を発表し、詳細な注記を付している。

⁽⁵⁾ Onians 2002: 92–136. (同書の閲覧に際しては種村隆元氏のご協力頂きました。)

⁽⁶⁾ Szántó 2015: 757–758.

⁽⁷⁾ Schaeffer & van der Kuijp 2009: 51.

⁽⁸⁾ Schaeffer & van der Kuijp 2009: 201, no. 22.86.

⁽⁹⁾ Jampa Samtan 2015: 50, no. 684. Jampa 本は後者の写本のみを用いた刊本である。両写本を用いたより完全な刊本は近々、御牧克己、宮崎泉、赤羽律、Orna Almogi、加納和雄の共著として出版される予定である。

⁽¹⁰⁾ Jampa Samtan 2016: 151, no 1910.

プトゥンの目録（1335 年成書）では「諸種の道次第に関するもの」（lam gyi rim pa sna tshogs kyi skor）の項目下に"slob dpon tri pi ta ka ma las mdzad pa'i tshul gsum gyi sgron ma rin chen bzang po'i 'gyur"とある（西岡 1983, no. 2702）。

なお各目録の中で記される著者名については、綴り方に異同があり、その違いを目立たせるために太字で示した。その詳細は後述したい。

4 梵文写本

本書の梵文写本は、目下、孤本としてのみ現存が確認されており、現在、ポタラ宮に所蔵されている。本稿筆者が解説に用いているのは、北京の中国蔵学研究中心に保存される、同梵文写本の写真版の紙焼きである。同写本は、羅炤氏の目録ではポタラ宮所蔵梵文写本の論疏部の中の整理番号 63 の函の中に納められているが、目録の中に本書への言及はない。同函には複数の作品が納められており⁽¹¹⁾、稀少な作品も少なからず看取される。本書に関連するものだけ挙げるとしてもクシャラシュリー（Kuśalaśrī）という人物が著した *Nayatrāyaprabheda* という 4 葉ほどの短編韻文作品などが存する。それらの解説は今後の課題として、詳細は別稿に譲りたい。

写本は、幅の短い貝葉にして⁽¹²⁾、都合 23 枚（1v1-23r1）からなる完本であり、12～13 世紀頃の東インドの書体で記されている。保存状態は良好であり、インクが擦れて難読な箇所がわずかにあることを除けば、翻刻に大きな労を要することはない。テキストとしては、修復可能な脱字や衍字や誤字などが見受けられるいっぽう、修復の困難な文も少なからずある。

5 チベット訳本と梵本

梵文写本とチベット訳本の間には、相互に補完する読みを呈する箇所（同系統のテキストの伝承を示唆）も見受けられるいっぽうで、テキストの伝承系統の違いを示す異読もあり、中には文単位の大きな異同もある。それらの異同については、稿を改めて論じたい。

そのような伝承系統の相違のほかに、チベット訳本には誤訳とみられる文言や、脱文もある（たとえば第 19 偈はチベット訳において欠けている⁽¹³⁾）。それゆえ本書を理解するためには、梵本の存在は必須となる。

6 著者

本書の著者については不明な部分が多い。これまで本書の著者の名前は、チベット訳の奥書に出る以下の記述がほぼ唯一の手がかりだった。

⁽¹¹⁾ 羅炤の記述によると、都合 329 葉が納められるという。

⁽¹²⁾ 羅炤の記述によると、30.5×5.5 cm.

⁽¹³⁾ Skt. Ms. fol. 19v5-6, Tib. D3703, 23r7.

「Nayatrāyapradīpa、大規範師なる尊師 Tri pi ṭa ka ma la 先生の御作、完。」

(D3307, 26r7: tshul gsum gyi sgron ma slob dpon chen po mtho btsun tri pi ṭa ka ma la'i zhal snga nas kyis mdzad pa rdzogs so ||)

ここに記述される著者名 Tripiṭakamala は、謎めいた名前であり、*Tripiṭakamāla あるいは*Tripiṭakamalla などと想定されてきた⁽¹⁴⁾。しかしこの度、発現した梵文写本に含まれる以下の奥書によって、その謎は解明された。

「Nayatrāyapradīpa、完。規範師なる尊師 Trivikrama 先生の御作。」

(Skt Ms. fol. 23r1: nayatrāyadīpaḥ samāptaḥ || kṛtir ācāryabhāṭṭatṛivikramapādānām ||)

ここに記述される著者名 Trivikrama は、周知のごとく宇宙の端まで三步で闊歩した神話に因んだヴィシュヌの異名であるが、このようなヒンドゥー教にゆかりのある名前は、当時の仏教者の間において、特段珍しいというわけでもない。

チベットに伝承された名前と梵文写本所載の名前を比較対照するならば、二つの可能性が想定できる。ひとつは本来 Trivikrama という音が、チベット訳本の奥書においては tri pi ṭa ma という音で写されて (vi は pi と音写され、kra は ṭa という近似する反舌音として解釈されたか)、さらにその末尾に la の音が、何らかの事情によって添加された可能性である。

もうひとつは、Trivikrama という音が、チベット人の耳には tri bi ka ma la と聞こえ、そのように転訛した形で綴られた可能性である。実際、tri bi ka ma la という綴りは、そのままツェルパ・ムンラムドルジェの論疏部目録に確認される(上述)。とくに vikrama の部分だけに焦点を当てると、それがチベットにおいて転訛して bi ka ma la と綴られる例は、他にも存在する。たとえば、Vikramaśīla は、チベットにおいて bi ka ma la śī la と綴られることがしばしばあり⁽¹⁵⁾、他にも Vikramapura が bi ka ma la pu ri と綴られ、Vikramavartin が bi ka ma la lbatī と綴られることなどがある。その場合、チベット訳奥書所掲の綴りである tri pi ṭa ka ma la の ṭa の音は、後に竄入した衍字として解釈される (p と b の交替は音韻上、字形上ともに頻繁に起こる)。

以上、二種の想定を挙げたが、一者を選ぶならば後者のほうが可能性は高いだろう(あるいは二者が混在した可能性も皆無でない)。

なお、tri pi ṭa ka ma la という綴りについて、例えばウーパロサルテンギョル目録は本文に著者名を tri pi ṭa ka ma la と綴り、その行間注において sde snod gsum gyi pad ma や pad ma'i sde snod gsum という語訳を与えている。この二つの訳語は共に後の補筆であ

⁽¹⁴⁾ Onians 2002: 92–93, Sanderson 2009: 233 n. 536, Szántó 2015: 757.

⁽¹⁵⁾ 例えば D 2313, 254v6–7: rgya gar gyi mkhan po de nyid dang || zhu chen gyi lo ts'a brgya brtson seng ges bi ka ma la shī la'i gtsug lag khang du bsgyur ba'o ||。その他、用例多数あり。

るが、この行間注を記した者は、この著者名を*Tripiṭaka-kamala のような形で解釈していたとみられる。

このように著者の名前については明らかとなったが、彼の事績については依然として不明のままである。なお本書の中には、彼の別の作品とみられる、*Paramārthapradīpa* なる一書への言及らしき一節が見受けられるが、その作品の存否については定かでない⁽¹⁶⁾。

7 年代の推定

彼の活躍した年代を確定できるような明確な証拠は、いまのところ見つかっていない。上述のように磯田 1979 が、カマラシーラから影響を受けた可能性を示唆しており、それに従うならば、カマラシーラの生存年（740–794 頃）を本書の暫定的な上限年代として措定できる。

いっぽうの本書の下限年代を考えるうえで参考となるのは、本書の一偈を引用する 18 点にのぼるインド撰述文献である。これらのうちで最も古いとみられるものは、バヴヤキールティ (Bhavyakīrti) による『秘密集会タントラ』への複注である⁽¹⁷⁾。苦米地等流氏の御助言によると、同書は本書から少なくとも都合 3 つの偈（筆者の暫定校訂本においては第 8、14、15 偈に対応）を引用している⁽¹⁸⁾。

またリンチェンサンポの訳になる、*Tattvasārasaṃgraha* という名の論書（9–10 世紀ころか）には、本書からの長い借用文とみられる一節が確認され、さらに本書のタイトルに言及して第 15 偈を引用している⁽¹⁹⁾。著者は Chos kyi dbang po という名前の人物であるが、詳細は不明である。

またすでに指摘のあるように、アドヴァヤヴァジュラの *Tattvaratnāvalī* にも本書第 15 偈は引用され、サハジャヴァジュラの *Sthitisamāsa* にも第 15 偈が引用され、それに対して独自の解釈を展開する自作とみられる偈が続いている⁽²⁰⁾。

これらの点を勘案すると、本書はおおよそ 9–10 世紀頃に成立したものとみられる。こ

⁽¹⁶⁾ Skt Ms. fol. 6r4: tathā punaḥ paramārthapradīpa eva nirṇītam iti tatraivāvadhārayitavyam.

⁽¹⁷⁾ 苦米地氏の御教示による。D 1793, *Pradīpoddyotanābhisandhiprakāśikā-nāma-vyākhyāṭikā*.

⁽¹⁸⁾ D1793, 43v2–3（第 8 偈）、61v2（第 15 偈）、62v5（第 14 偈）参照。第 15 偈の引用の後の箇所には本書と平行する議論も見られる。

⁽¹⁹⁾ D 3711, 79r4–82r2 のほとんどの文言が、本書の冒頭部（Skt. Ms. fols. 1v3–5v1）と一致する。引用箇所は次の通り。D 3711, 98v4: tshul gsum gyi sgron ma las | don gcig na yang mar mongs dang || thabs mang dka' ba med pa dang || dbang po mnon po'i dbang mdzad pas || sngags kyi theg pa khyad par 'phags || zhes bshad pa dang. 酒井 1985: 8 がこの引用の存在について指摘している。Szántó 2015: 758 によると、所引テキストの年代から予想するに、おおよそ 9 世紀以降の作品であろうと予想する。なお Szántó（同）によると、同作品（D 3711）の主張（彼の時代には密教を实践するにふさわしい人がいないとの主張）は、彼の弟子の著 **Mantranayāloka* (D 3710) によって論駁されているという。

⁽²⁰⁾ Onians 2002: 139–146. 同書の密教に関する部分については松本恒爾氏が精力的に読解を進めており、筆者もその恩恵に与る者である。

の年代は、チベット訳本の訳者リンチェンサンポの年代を顧慮しても逸脱するものではない。

8 冒頭偈と末尾偈および三理趣について

本書の著述目的を知る上では、冒頭偈と末尾偈が参考になる。まず冒頭偈を提示すると下記の如くである (Ms. fol. 1v1–2)。

般若にてつくられた光明をもって世間を観察する眼を有し、智の光にて暗闇を打ち破った勝者たる守護者に帰命します。

namaḥ prajñākṛtāloka jagadadhyakṣacakṣuṣe⁽²¹⁾ |
jñāya jñānatejobhir dhvastadhvāntāya tāyine ||

教言に従って、論理に従って、智慧の力に従って、私によって、この『三理趣灯火』が、真実を証明するために、語られる。

yathāgamaṃ yathānyāyaṃ yathāprajñābalaṃ mayā |
nayatrāyapra_(1v2)dīpo 'yaṃ tatvasiddhyai nigadyate ||

もし不運にも、誰一人として本書を理解することができないならば、その場合、本書は、私だけにとっての自分の心を浄化する手段となるだろう。

yadi nainaṃ janaḥ kaścid bhāgyahīnaḥ prapatsyate |
svamaṇaḥśodhanopāyo mamaivāyaṃ bhaviṣyati ||

また、末尾偈は下記のごとくである (Ms. fol. 22v5–23r1)。

信愛をもって無垢なる師に久しく仕え、解説を通じて三理趣を明瞭に理解した後で、智貧しき者たちによって確定されなかった、そのことが、私によって、混乱なく、教言の意味の心髄を伴って、語られた。

ciram amalagurum upāśya bhaktyā
sphuṭam adhigamya nayatrāyaṃ⁽²²⁾ niruktyā |
kṛśamatibhir a_(22v6)nīścitam mayaitat
kathitam anākulam āgamārthasāraṃ ||⁽²³⁾

[四] 諦を真実とする理趣（声聞理趣）における意味と、波羅蜜理趣における意味

⁽²¹⁾ prajñākṛtā-] Ms. Cf. Tib. *prajñākṛpā-, snying rje.

⁽²²⁾ -trāyaṃ] em., -traya Ms.

⁽²³⁾ 韻律は Puṣpitāgrā.

と、大真言理趣における意味とが、まとめてここで説示された。

satyatattvanaye⁽²⁴⁾ yo 'rtho yo 'rthaḥ pāramitānaye |
mahāmantranayārthaś ca saṅkṣepeneha darśitaḥ ||

三理趣の海に潜ってから、師の教えに追従する道を通じて私が、ここにおいて会得した不二〔智〕なる大いなる輝きをもつ宝石が、世界の人々の繁栄のためにありますように。

yad avagāhya nayatrayasāga^(23r1)raṁ
gurukathānugūṇena⁽²⁵⁾ pathā mayā |
adhigataṁ jagato 'stu samṛddhaye
atanudīdhitiratnam⁽²⁶⁾ ihādvayam⁽²⁷⁾ ||

とくに末尾偈において明かされるように、本書は、三つの理趣すなわち、四諦を真実とする理趣、波羅蜜理趣、真言理趣についての内実を明かし、その優劣を論じることを目的としている。そのことは次の一文において端的に表現されている。

これに関して、〔四〕諦を真実とする瑜伽者（声聞）は、下根の者であると示される。真実と方便とを知らないからである。いっぽう、〔六〕波羅蜜を真実とする瑜伽者（大乘波羅蜜理趣）は中根の者である。〔真実は知っているが〕方便だけについては錯乱しているからである。他方、真言門から行を行ずる者は、いかなることについても愚鈍ではないので、利根の者たるべし。

atra satyatattvayogī mṛdvindriyo lakṣyate, tattvopāyayor anabhijñatvāt | pāramitātattvayogī
tu madhyendriya upāya eva bhrāntatvāt | mantramukhacaryācārī tu na kvacid api
vyāmuhyatīti tīkṣṇendriyaḥ syāt | (Ms. fol. 19v6–20r1)

つまり声聞理趣、波羅蜜理趣、真言理趣の行者が、それぞれ、下根者、中根者、上根者に相当すると論じている。そして声聞理趣の行者は真実と方便の双方ともを知らず、波羅蜜理趣の行者は真実のみを知るが方便を知らず、真言理趣の行者だけが双方を知るといふ。

さらに別の箇所（Ms. fol. 18v6–19v4）では、上根者の真言理趣の行者にも三段階のレベルがあるという。つまり上の上根者、上の中根者、上の下根者が存在するという。そ

⁽²⁴⁾ -naye] em., -nayo Ms.

⁽²⁵⁾ gurukathā-] Ms. Cf. Tib. *gurupathā-.

⁽²⁶⁾ atanu-] conj., danuta Ms. 検討を要する。tadanu または tad anu と読むことも可能か。チベツト訳は*anutanotu に類する読みを示唆するか。結論は保留したい。

⁽²⁷⁾ ihā-] Ms., Cf. Tib. *ivā-.

して彼らに向けて世尊は、順次、マハームドラー、ジュニャーナムドラー、サマヤムドラー（およびカルマムドラー）をそれぞれ御教示なさった、という。

9 全体の骨子

本書は、韻文（およそ 19 偈⁽²⁸⁾）と散文から構成される。散文部分は、偈頌の導入および解説をする場合もあれば、発展的な議論や傍論を展開することもあるので、単なる偈文の注釈ではない。韻文部と散文部の両者とも、同一人物の手になるものと考えて差し支えないだろう。

内容は概ね、声聞理趣、波羅蜜理趣、真言理趣の三理趣の順に沿って記述される。ただし時としてその叙述はやや散漫であり、自由な議論が展開している。現時点での筆者の理解の及んだ範囲で、その内容をごく粗く素描するならば、次のようになろう。なお下記に提示する偈番号は、おおよその目安である。韻文部と散文部を厳密に区分した詳細な科段については稿を改めたい。

第 1～5 偈では、声聞乗と大乘との優劣を論じる。特にその到達点について論じ、真実とは大乘の「不二智」（advaya-jñāna）であると規定して、いっぽうの声聞の四聖諦はそれ自体として真実ではなく、むしろ人々を正しい道へと誘導するための方便であることを論証してゆく。特にここに見られる声聞側からの論難は、仮にそれが想定上の論難である可能性があるとしても、興味深い。第 6～7 偈では、菩薩の喜捨および浄化された菩薩の貪を論じ、第 8～9 偈では菩薩の慈悲の潜在余力が無尽であることを論じる。

第 10 偈では、大乘の波羅蜜理趣（顕教）の勝れている点を列挙し、第 11～14 偈において、そのひとつひとつを解説する。散文部はさらに傍論のような形で、異教徒と声聞乗の三昧とが本質的には同一であると断じる。

そして第 15 偈では、大乘の真言理趣の勝れている点を四つ列挙し（上記本稿第 8 節参照）、第 16～19 偈においてそのひとつひとつを解説する。

その四点の中の第一点である「無愚鈍性」を説明する一節では、真言行者は観想の中ですべての衆生を一斉に救済する点で、一人ずつ救済する波羅蜜理趣よりも迅速であることを論じる。

第二点「多方便性」の説明においては、真言行者の資質と適性に応じた三種の観想法を挙げる。つまり、真言行者の諸々の心所に各々対応する尊格を配当しながら曼荼羅を完成させる「心曼荼羅」と、母音と子音からなる字母のすべての音素に対してそれぞれ対応する尊格を配当して曼荼羅を完成させる「語曼荼羅」と、各尊格の身体的な姿かたちを観想して曼荼羅を完成させる「身曼荼羅」という三種の曼荼羅観想法を記す。それらは基本的には秘密集会タントラの諸尊であり、ジュニャーナパーダ流のそれに近いが

⁽²⁸⁾ 現時点では偈の総数を暫定的に 19 と計算したが、引用偈と区別が付きにくいものもあり、今後、変動する可能性もある。

(29)、本書に特有の記述も少なくない。その後に四種の真言典籍として、クリヤータントラ、ムーラタントラ、チャルヤータントラ、ヨーガタントラという他所には見当たらないタントラの分類法を挙げる⁽³⁰⁾。

第三点「易行性」についての説明では、行者本人の意識と、それを観察する者の認識において、ある行が「易行なり」と認識されるならば、その行は易行に他ならないと論じる。さらに、上の上根者、上の中根者、上の下根者と四種のムドラーを挙げる（本稿第8節参照）。

第四点である、密教が「利根者を専らとする」という点については、声聞理趣と波羅蜜理趣との比較によってそれを明かす（第8節参照）。

さらに本書の最後では付論として、真言理趣における調伏法や敬愛法を正当化するために、慈悲と瞋恚の本質的な同一性や、調伏法などの方便としての効能を論じる。

以上は、ごく暫定的な読解の段階における筆者の理解に基づくものに過ぎず、多くの興味深い議論はあえて捨象した。今後、テキストの読解を深めたうえで、正確な科段を準備したい。

10 おわりに

本稿では *Nayatrāyapradīpa* の新出梵本およびその周辺について予備的な報告を行った。すなわち、梵文写本はポタラ宮の所蔵される 23 葉からなる完本であること、著者名について従来チベット訳で知られていた *tri pi ṭa ka ma la*（本来はツェルパ目録所掲の *tri bi ka ma la* か）は梵本では *Trivikrama* と記されること、その成立はおよそ 9-10 世紀ころと推定されること、そして本書は三種の理趣（*nayatrāya*）、つまり声聞理趣、大乘の波羅蜜理趣、大乘の真言理趣の優劣について 19 偈ほどの韻文および散文によって論じる作品であることについて報告した。既知のインド撰述の宗義書類と本書を比べると、宗義書類が学説体系の概説に重きを置いているのに対して、本書は真実（*tattva*）とそこに至るための方便（*upāya*）という二項目に焦点を定めて三理趣の優劣を判定している点に違いがあるといえる。そして真言理趣の優位性についての論述がとりわけ詳しい点も本書の大きな特徴といえる。梵文校訂本と訳注については、順次発表してゆきたい。

(29) 苦米地等流氏の御教示による。

(30) なお、プトゥンはこれら四者が、クリヤータントラ、チャルヤータントラ、ヨーガタントラ、マハーヨーガタントラに対応すると解釈する。*dPal dus kyi 'khor lo'i rgyud kyi rgyal po'i bshad thabs kyi yan lag rnam par bzhag pa rgyud sde rin po che thams cad kyi zab don gyi sgo 'byed par byed pa rin po che gces pa'i lde mig*, *Collected Works of Bu ston rin chen grub*, vol. Nga, 22r6-v1: yang tsul gsum gyi sgron ma las | bya ba dang | rtsa ba'i rgyud dang | spyod pa'i rgyud dang | rnal 'byor chen po'i rgyud dang bzhir bshad pa dang 'gal zhe na | skyon med de | rtsa ba'i rgyud ni spyod pa'i rgyud yin la | spyod pa'i rgyud ni rnal 'byor gyi rgyud do ||

附 論

Nayatrāyapradīpa 本偈（暫定版）

下記は、*Nayatrāyapradīpa* において本偈とみられる偈を、現段階のテキストの理解にしたがって、暫定的に抽出したものである。それゆえ偈番号（v.1–v.19）は便宜的なものであり、今後変動する可能性がある。写本特有の綴り字などは適宜、特に断り書きすることなく一般的な形にして提示した。

na rte saṃvedanāl loko nirvāṇaṃ ceti de_(1v3)śitam |
buddhair atra pramāṇaṃ ca vṛddhaiḥ⁽³¹⁾ sphuṭam udīritam || v. 1

satyopadeśaḥ kleśānāṃ prahāṇāya yathāśubhā |
viṣkambhaṇāya tattvaṃ tu paramārthātmakam matam || v. 2

duḥkhādeḥ satyatā hy uktā śrāvakāṇāṃ pra_(2v6)vṛttaye |
asatyam api kāruṇyād asty⁽³²⁾ ātmeti vaco yathā || v. 3

mahāyāne svayaṃ śāstrā tathoktam iti tat tathā |
pratīyus⁽³³⁾ tat pratīpaṃ tu katham vākyam vinā muneḥ⁽³⁴⁾ || v. 4

yuktyāgamābhyāṃ yat siddham ta_(6r3)t tyaktvānāgamam⁽³⁵⁾ katham |
tattvam anyad grahīṣyanti vinā mānaṃ manīṣiṇaḥ || v. 5

prāṇān sutān atha mahīm pramadām⁽³⁶⁾ dhanāni
sattvottamās tribhuvanoddhṛtibaddhakakṣāḥ⁽³⁷⁾ |
ye santyajanti tṛ_(6v4)ṇavat kṛpaṇasya hetoḥ
ke 'nye tataḥ kṣititale 'dhikarāgabhājāḥ || v. 6

yathā mārgajñatāśuddho rāgas teṣāṃ tridhātuke |

⁽³¹⁾ vṛddhaiḥ] em. (cf. rgan po rnam kyī[s]) , vṛddhyai Ms.

⁽³²⁾ asty] em., asy Ms.

⁽³³⁾ pratīyās] em. (or pratīyus, pratīyaṃs?), pratīyas Ms.

⁽³⁴⁾ muneḥ] em., mune Ms.

⁽³⁵⁾ -āgamam-] em., -āsamaṃ Ms.

⁽³⁶⁾ mahīm pramadām] em., mahī pramadā Ms.

⁽³⁷⁾ tribhuvanoddhṛti-] em., tribhavanoddhṛta- Ms.

tathottamapadaprāpter⁽³⁸⁾ upāyaḥ so 'pi dhīmatām || v. 7

ye nirdagdhasamastadoṣajanānīsatkāyadr̥ṣṭīndhanā
nirmūlasvapraprabhedaviśayās teṣāṃ na⁽³⁹⁾ doṣādayaḥ |
nirdoṣā api^(8r1) vidyāyeva kṛpayā māyānarāḥ⁽⁴⁰⁾ karmasu
preryante sudhiyaḥ purāpraṇidhitaś cakraḥbhamāvegavat || v. 8

jaḍājaḍāśrayatvena saṃskāre 'sti viśiṣṭatā |
viparyāsāviparyāsaviśayatvāt kṣayākṣayau || v. 9

praṇidhānapravṛtteś ca gā^(9r3)mbhīryaudāryayos tathā |
anivṛtteḥ phalāpteś ca mahāyānaṃ viśiṣyate || v. 10

tādṛk praṇidhir⁽⁴¹⁾ ādyaḥ sa tadgotrāṇām anuttaraḥ |
yat tadaivābhisambuddhā⁽⁴²⁾ ^(9r5)iva pūjyāḥ surāsuraiḥ || v. 11

yā kṛpā sattvaviśayā pravṛttau dharmatāsthitā |
sānāmbanātām prāptā gambhīrodāratām vrajet || v. 12

ana^(10r6)ntottaptatattvaikarasaś te dharmadhātutām |
praṇidhānādibhiḥ prāptā nivartante punaḥ katham || v. 13

ānandam avyayaṃ jyotir viśvarūpam akalpanam |
mahārasakṛpā^(10v3)viddham dharmadhātvātmakam phalam || v. 14

ekārthatve 'py asaṃmohād bahūpāyād aduṣkarāt |
tīkṣṇendriyādhikārāc ca mantraśāstram viśiṣyate || v. 15

vivecayann upāyāgram gr̥hītvorukṛpām⁽⁴³⁾ kṛtī |
gaṇopāyeṣv asārajñāḥ⁽⁴⁴⁾ prāpnoti padam acyutam || v. 16

⁽³⁸⁾ tathottama-] em., tathoma- Ms.

⁽³⁹⁾ na] em., ca Ms.

⁽⁴⁰⁾ -narāḥ] em., -narā Ms.

⁽⁴¹⁾ praṇidhir] em., praṇidhān Ms

⁽⁴²⁾ -buddhā] em., -buddhaḥ Ms.

⁽⁴³⁾ Cf. mukhyam upāyam anveṣate; mahākṛpām āmukhīkurvan (Ms. fols. 12v6, 13r2).

⁽⁴⁴⁾ asārajñāḥ] em., asārajñam Ms.

sarvasattvārthasāmsiddhyai sarvopāyaṃ nayottamam ||
jagāda jagataḥ śāstā caturbhedam mahādhiyām || v. 17

yad yathā yasya yatreṣṭam^(18r4) tam tatraiva niyojayan |
prāpayann īhitān arthān paramārtham jagau munih | v. 18

prāpnoti śuddhi⁽⁴⁵⁾ yaḥ kurvan karmā^(19v6)ny āpāyikāny api |
upāyajñatayā yogī kaḥ syāt tīkṣṇendriyas tataḥ || v. 19

参考文献

(和文)

磯田熙文

1978 「pāramitāyāna と mantrayāna」、『東北大学文学部研究年報』29、105–135.

1979 「『Nayatrāyapradīpa』について」、『印度學佛教學研究』28-1、408–411.

酒井柴朗

1985 「密教要文の一節(1)：真性心髓集に引用される菩提心積について」、『密教文化』
151、1–9.

松長有慶

1973 「mantrayāna, mantranaya, vajrayāna」、『印度學佛教學研究』21-2、50–54.

西岡祖秀

1983 「『プトゥン仏教史』目録部索引 III」、『東京大学文学部文化交流研究施設研究紀
要』6. 37–201.

(欧文ほか)

Edgerton, Franklin

1953 *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar*. New Haven: Yale University Press.

Jampa Samten

2015 *bsTan bcos kyi dkar chag: bCom ldan rig ral gyis bzhengs pa'i snar thang bstan 'gyur
dkar chag (Catalogue of the Narthang Manuscript Tanjgyur)*. Dharamsala: Library of
Tibetan Works & Archives.

Jampa Samten

2016 *Catalogue of the Tshal pa Manuscript Tangyur*. Varanasi: Central University of Tibetan
Studies.

⁽⁴⁵⁾ *Metri causa* (for *śuddhiṃ*). なお仏教梵語文法では、単数・対格として *śuddhi* という語形 (Edgerton 1953: §10.50)、あるいは複数・対格として *śuddhiyaḥ* という語形が認められる (Edgerton 1953: §10.168)。久間泰賢氏の御教示による。

Moriyama, Seitetsu

1984 An Annotated Translation of Kamalaśīla's Sarvadarmanīḥsvabhāvasiddhi Part IV. 佛教大学研究紀要 69, 36–86.

Isaacson, Harunaga & Sferra, Francesco

2014 *The Sekanirdeśa of Maitreyañātha (Advayavajra) with the Sekanirdeśapañjikā of Rāmapāla: Critical Edition of the Sanskrit and Tibetan Texts with English Translation and Reproductions of the MSS.* Napoli: Università degli Studi di Napoli “L’Orientale.”

Onians, Isabelle

2002 *Tantric Buddhist Apologetics, or Antinomianism as a Norm*, D.Phil. dissertation, Oxford, Trinity Term.

Sanderson, Alexis

2009 The Śaiva Age — The Rise and Dominance of Śaivism during the Early Medieval Period. In: Shingo Einoo (ed.), *Genesis and Development of Tantrism*. Tokyo: Institute of Oriental Culture, University of Tokyo.

Schaeffer, Kurtis R. & van der Kuijp, Leonard

2009 *An Early Tibetan Survey of Buddhist Literature: The Bstan pa rgyas pa rgyan gyi nyi ’od of Bcom ldan ral gri*. Cambridge: Harvard University Press.

Szántó, Péter-Dániel

2015 "Tantric Prakaraṇas." In: *Brill Encyclopedia of Buddhism*, vol. 1, pp. 756-761.

謝 辞

本稿の執筆にあたっては、まず中国蔵学研究中心の李学竹氏の寛大なご協力を得た。そして Harunaga Isaacson 氏、芭米地等流氏、種村隆元氏、久間泰賢氏、倉西憲一氏、Bang Junlang 氏、伊集院栞氏から多数の重要なご教示を得た。記して謝意を表します。本稿は平成 30 年度科学研究費助成、課題番号 [26284008] [25370059] [25284014] [16K13154]の研究成果の一部である。